

宮古島沖から得られた日本初記録のコモレビアゴアマダイ (新称) *Opistognathus erdmanni* (アゴアマダイ科)

福島 周¹・千徳明日香²・小枝圭太²

¹ 〒 903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1 番地 琉球大学大学院理工学研究科海洋自然科学専攻

² 〒 903-0213 沖縄県中頭郡西原町千原 1 番地 琉球大学理学部

(2026 年 1 月 19 日受付；2026 年 5 月 10 日改訂；2026 年 5 月 11 日受理；2026 年 7 月 20 日 J-STAGE 早期公開)

キーワード：Opistognathidae, アゴアマダイ属, 生物地理, 琉球列島, 標準和名

魚 類 学 雑 誌
Japanese Journal of
Ichthyology

© The Ichthyological Society of Japan 2026

Shu Fukushima, Asuka Sentoku and Keita Koeda*. 2026. First Japanese record of *Opistognathus erdmanni* (Opistognathidae) off Miyako Island, Ryukyu Archipelago. Japan. J. Ichthyol., DOI: 10.11369/jji.26-003.

Abstract A single specimen of *Opistognathus* (Opistognathidae), collected by biological dredge at a depth of ca. 105 m off Miyako Island (25°03–04'N, 125°11–12'E), was identified as *Opistognathus erdmanni* Smith-Vaniz, 2023, previously known only from the Mergui Islands, in the Andaman Sea off Myanmar (50–55 m depth). The specimen, representing the second record of the species and first from Japan, possessed the following combination of diagnostic features: dorsal-fin rays XI, 11; anal-fin rays II, 10; gill rakers 9 + 22 = 31; predorsal area scaleless; posterior end of upper jaw rigid; 5 dark blotches on dorsum; scales without black spots; dorsal, anal and caudal fins yellowish-white, no white spots on caudal fin; pelvic fin translucent white. The new standard Japanese name “Komorebi-agoamadai” is proposed for *O. erdmanni*.

*Corresponding author: University of the Ryukyus, 1 Senbaru, Nishihara, Okinawa 903-0213, Japan (e-mail: koeda@cs.u-ryukyu.ac.jp)

アゴアマダイ属 *Opistognathus* Cuvier, 1816 は 94 有効種を含み、そのうち 63 種はインド・西太平洋域から記録されている (Smith-Vaniz, 2023 ; Su and Ho, 2024)。本属魚類は巣穴に隠れる習性をもつことから、底曳網やドレッジで採集される場合を除き、その大多数は観察や捕獲が容易でない (Smith-Vaniz, 1999, 2023)。それに加えて、サンゴ礁に隣接する砂地に好んで生息するため、サンゴ礁に注目した魚類相調査ではその生息が看過されやすく、したがって本属の大半の種の標本はごくわずかしかなかった (Smith-Vaniz, 2023)。本属は多数の未記載種を含むことが知られていたが (Smith-Vaniz, 2011, 2016)、近年、Smith-Vaniz (2023) によりインド・太平洋域に分布するアゴアマダイ属魚類の包括的な分類学的検討が行われ、18 種が新種として記載された。また、Smith-Vaniz (2023) に降に日本近海からはシラタマアゴアマダイ

Opistognathus ctenion Fujiwara, Motomura and Shinohara, 2023 が記載されたほか、従来未記載種として知られていたホソミアゴアマダイ *Opistognathus abei* Fujiwara and Ikeda, 2024 が記載された (Fujiwara et al., 2023 ; Fujiwara and Ikeda, 2024)。現在、日本国内では 17 種のアゴアマダイ属魚類が記録されているが (林・大栗, 2007 ; Fujiwara et al., 2023 ; 古橋ほか, 2023 ; Fujiwara and Ikeda, 2024)、Smith-Vaniz (2023) によるとさらに 2 未記載種が日本に分布しているとされていた。そのうちの 1 種 (*Opistognathus* sp. 1) は、のちに Su and Ho (2024) によって *Opistognathus cryo* Su and Ho, 2024 と同定された。一方で Koreeda and Motomura (2025) は *O. cryo* がセトアマダイ *Opistognathus liturus* Smith-Vaniz and Yoshino, 1985 と同種である可能性を示唆している。これらを別種とみなすか否かで日本産の種数は 18 種または 19 種と変動するが、本稿では

その根拠が明示されていない Koreeda and Motomura (2025) の見解を保留し、暫定的に 19 種 (既知種 18 種および未記載種 1 種) として扱う。

2025 年 5 月 17 日に沖縄県宮古島沖で行われたドレッジを用いた生物採集調査において、1 個体のアゴアマダイ属魚類が採集された。本標本を精査したところ、Smith-Vaniz (2023) によって記載された *Opistognathus erdmanni* Smith-Vaniz, 2023 に同定された。本標本は国内における本種の初めての記録となるため報告する。また、本標本を基準標本として本種に新標準和名を提唱する。

材 料 と 方 法

Smith-Vaniz (2023) に従って標本の計数・計測を行った。標準体長は体長または SL と表記した。体の各部位の計測はデジタルノギスを用いて 0.1 mm 単位で行い、得られた計測値を体長または頭長に対する百分率で示した。鱗と頭部側線系の観察は、サイアニンブルー染色を行ったうえで双眼実体顕微鏡を用いて行った。色彩の記載は採集直後に撮影された標本のカラー写真に基づく。採集個体は展鱗・撮影したのち 10% ホルマリンで固定し、その後 70% エタノールに置換して保管した。本研究で使用された標本は琉球大学魚類学研究室 (URIL) に登録・保管されている。

Opistognathus erdmanni Smith-Vaniz, 2023

コモレビアゴアマダイ (新称)

(Figs. 1–2 ; Table 1)

記載標本 URIL 2730, 36.0 mm SL, 沖縄県宮古島沖 (25°03–04'N, 125°11–12'E), 水深約 105 m, 2025 年 5 月 17 日, ドレッジ, 長崎丸操業, 小枝圭太・千徳明日香採集。

記載 計数・計測形質を Table 1 に示した (鱗数は破損のため計数できなかった)。体は長く、体高は腹鰭基底付近で最大。頭部はやや側扁し、体は頭部より側扁する (Fig. 1)。体の背縁と腹縁はほぼ直線状かつ平行。尾柄は短く、尾柄高は体高よりわずかに低い。吻は短く、吻端から眼前上方にかけて輪郭は傾斜し、その後方は背鰭起部にかけてわずかに上昇する。前鼻孔は短い管状で、吻端と眼窩前縁の中間に位置する。後鼻孔は楕円形で、眼の前縁に隣接する。眼は大きくやや楕円形で、頭部前方部の背縁付近に位置する。両眼は頭部背面で接近し、眼窩は頭部背縁よりわずかに

突出する。口は端位で大きく、主上顎骨の後端は眼窩後縁を越える。主上顎骨の後部は前部より幅広く、後端は硬く角張り、後方によく伸長する柔軟な被膜を欠く。頭部側線管とその感覚孔はよく発達し、両唇、主上顎骨、および鰓蓋下部を除いた頭部のほぼ全域に感覚孔が分布する (Fig. 2 ; ただし頭部背面の一部は損傷しており、その部分の感覚孔の有無は確認できなかった)。両顎歯は小円錐歯で、上顎の前部で 3 列、下顎の前部で 2, 3 列の歯帯をなし、最外縁の列は後方まで続く。鋤骨歯と口蓋骨歯はない。舌はやや細く、先端は円い。鰓耙は円錐形で、やや長い。側線は 1 本で、後側頭部から体背縁近くを体軸と平行してはしり、背鰭第 4 軟条基部の直下まで達する。体側鱗は円鱗 (多くは脱落し、表皮が破損しているが、そのような部位でも一部では鱗嚢が認められる)。残存する鱗と鱗嚢の分布から判断して、頭部、峡部、背鰭起部前方、胸部、および腋部は無鱗。

背鰭は 1 基で基底が長く、背鰭起部は鰓蓋後縁の上方に位置する。背鰭棘条部の上縁中央部は緩やかな弧状、第 9 棘条が最長。背鰭棘の先端は二又しない。背鰭軟条部は背鰭棘条部より高く、外縁は円い。背鰭軟条は前方の 4 軟条を除き分枝する。臀鰭起部は背鰭第 1 軟条基部の下方に位置し、臀鰭基底後端は背鰭基底後端よりわずかに前方に位置する。臀鰭の外縁はわずかに円く、中央部付近で高い。臀鰭軟条は第 6 軟条が最長で、前方の 4 軟条を除きすべて分枝する。胸鰭は扇形、その先端は背鰭第 10 棘条基部の下方に達する。腹鰭は細長く、第 2 軟条が最長。腹鰭の先端は糸状に伸び、その後端は背鰭第 9 棘条基部の下方に達する。尾鰭は円形。

鮮時の体色 体と頭部の地色は一樣に淡褐色 (Fig. 1A, B)。吻から背鰭前方にかけての頭部背面に不定形の 1 個の黒色斑があり、後方にむかうにつれて細くなる。側頭部にも同様に不定形の黒色斑があり、前鰓蓋骨の縁に沿って後下方へ伸び下鰓蓋骨の下部に達する。眼の後方と下方にも不明瞭な楕円形の黒色斑がそれぞれ 1 個ある。主上顎骨の後部に明瞭な 1 個の黒色斑がある。頬部には口角に沿って 1 個の黒色斑がある。鰓膜は黄色を帯びる。体側には約 16 本の不明瞭な細い暗色縦帯が鱗列にそってはしり、このうち中央の 11 本は尾鰭基底に達する。背鰭基底に沿って、5 個のやや明瞭な円形の暗色斑が等間隔に並び、それらの斑紋の下部は下方に延長し、腹部まで達する不明瞭な、やや緑色がかった暗色横帯となる。最前方の

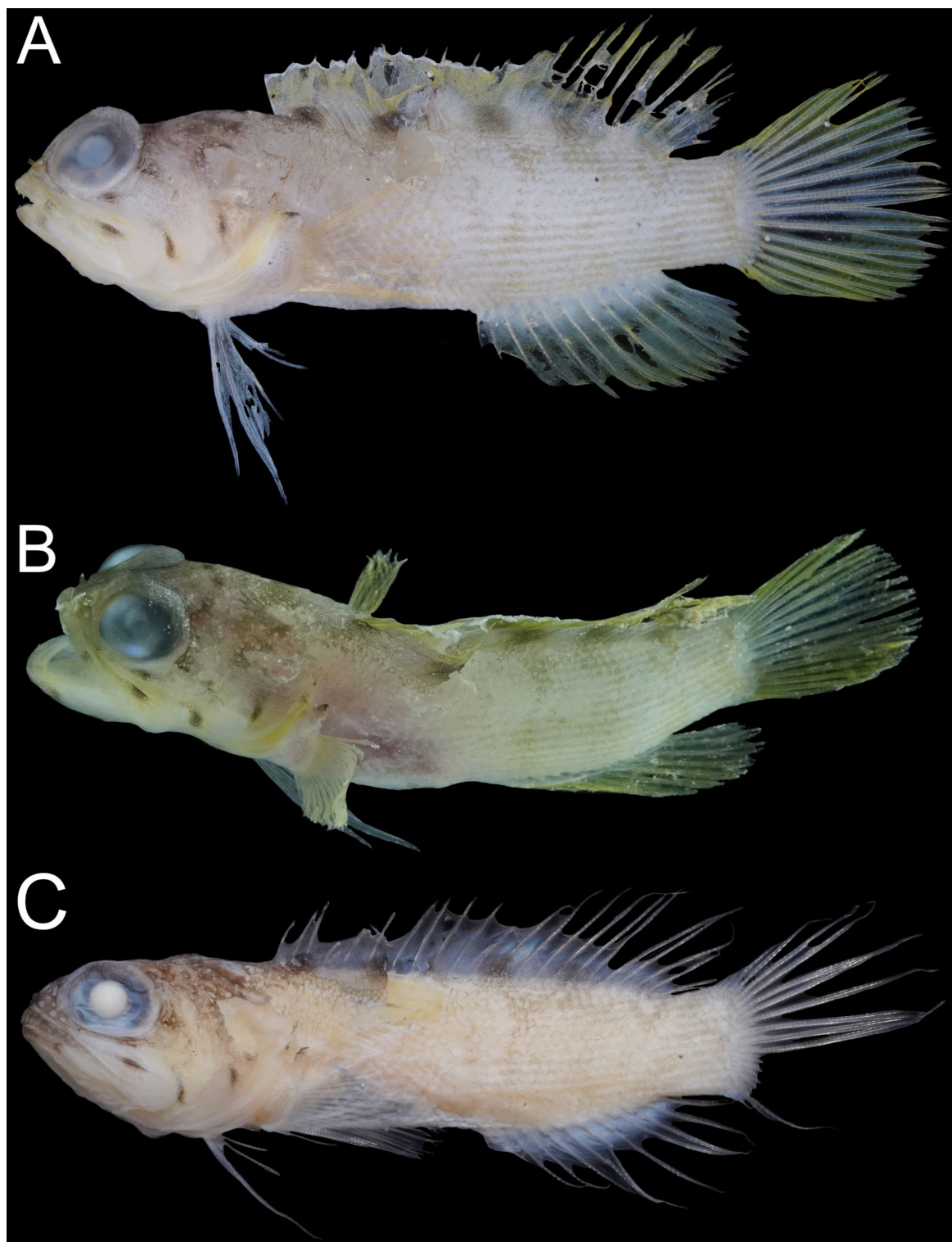


Fig. 1. Fresh (A, B) (B: photographed immediately after collection) and preserved (C) specimen of *Opistognathus erdmanni*, URIL 2730, 36.0 mm SL, off Miyako Island, Okinawa, Japan.

横帯は背鰭第1から第4棘条の間に位置し、最後方の横帯は背鰭基底後端に位置する。背鰭は下半分が体の地色と同じ淡褐色、上半分が黄緑色で外

縁は白く縁取られる。背鰭第2-9軟条の先端は黄色（鰭膜は破損しており色彩は不明瞭）。臀鰭は半透明の黄色で、基部側の1/3は白色を帯びる。胸鰭

は黄色。腹鰭は半透明の白色。尾鰭中央部は黄白色で、その上部と下部の1/4は黄色。口床は淡色。

固定後の体色 体の地色は黄褐色 (Fig. 1C)。黒色斑はわずかに退色する。各鰭は黄色が退色し、白色半透明となる。

分布・生息環境 これまで本種はインド洋東部アンダマン海のメルギーニ諸島沖 (ミャンマー) の水深 50–55 m からのみ記録されていたが (Smith-Vaniz, 2023), 本研究により琉球列島宮古島沖の水深約 105 m から確認された。記載標本が採集された地点の底質は中粒砂を主体とし、その中に礫が散在する。これらの礫は硬質基盤として機能し、海綿動物や八放サンゴ類などの付着性生物が着生することで、底生群集が形成されている。

備考 記載標本は、主上顎後端が硬く角張り、後方によく伸長する柔軟な被膜を欠く；背鰭起部前方は無鱗；側線は1本で体背縁近くに位置し、その後端は背鰭第4軟条基底に位置する；鰓耙数は $9 + 22 = 31$ ；背鰭は11棘11軟条；臀鰭は2棘10軟条；口床は淡色；下顎に幅広い黒色帯はない；鰓蓋に瞳孔大の暗色斑はない；鱗は黒色斑からなる縦帯を形成しない；肩帯部に暗色斑がない；背鰭基底にそって5個の暗色斑がある；背鰭、臀鰭、および尾鰭は黄白色で黒色ではない；尾鰭に白色斑がない；および腹鰭は白色で黄色ではないことなどの形質が Smith-Vaniz (2023) の示した *O. erdmanni* の識別的特徴によく一致したため、本種に同定された。

Smith-Vaniz (2023) は5個体のタイプ標本に基づき *O. erdmanni* を記載し、計数・計測値を示した。本研究で記載した標本は、タイプ標本と比較して胸鰭条数が多く20であった (タイプ標本では19) ほか、下枝鰓耙数が多く22であった (タイプ標本では19もしくは21) (Table 1)。また、本記載標本の計測値は、背鰭基底長、腹鰭長、体高、眼後上顎長の値が、タイプ標本の値と比較してわずかに異なった (Table 1)。これらの形質にみられた数値の差は Smith-Vaniz (2023) が記載した *Opistognathus parvus* Smith-Vaniz, 2023 にみられる種内変異と同程度かつ軽微であるため、本研究でもこれらを *O. erdmanni* の種内変異と判断した。なお、宮古島沖産の標本は Smith-Vaniz (2023) が用いた5標本の体長の範囲に含まれるため、計測値の相違が成長段階の違いに起因するとは考えられない。

Opistognathus erdmanni は、主上顎後端が硬い、臀鰭が2棘10–11軟条、背鰭に4–6個の暗色斑が

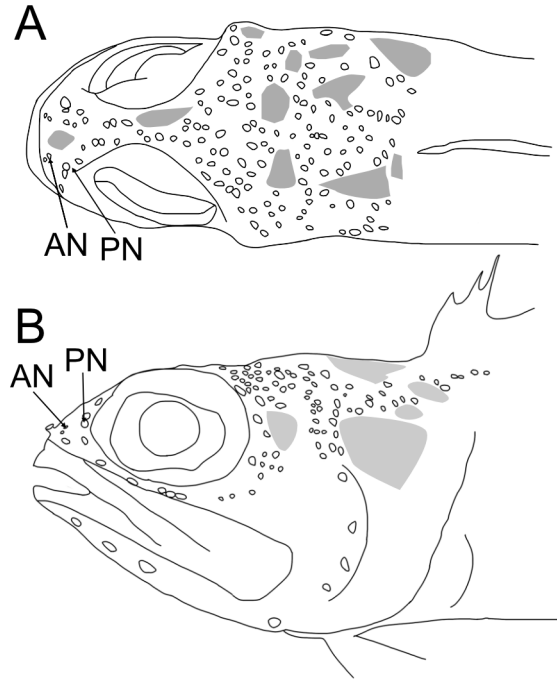


Fig. 2. Schematic drawing of dorsal (A) and lateral views of head of *Opistognathus erdmanni*, URIL 2730, showing distribution of sensory pores. AN and PN indicate anterior and posterior nostrils. Damaged areas shaded.

あり、暗色の体側鱗が鱗列にそった細い縞模様を形成するように見える点で、*Opistognathus asper* Smith-Vaniz, 2023, *Opistognathus bathyphilus* Smith-Vaniz, 2023 および *Opistognathus biporus* Smith-Vaniz, 2023 と類似する (いずれも日本には分布しない) (Smith-Vaniz, 2023)。しかし、*O. erdmanni* は鰓耙数が29–31であること (*O. asper* では33–34；*O. bathyphilus* と *O. biporus* では鰓耙数が37)、頭部の暗色斑は比較的大きく、帯状であること (*O. asper* では頭部の模様は、小さい黒色素胞からなる、まだら模様)、背鰭前方域に明瞭で大きな黒色斑がないこと (*O. bathyphilus* と *O. biporus* ではある) でこれら3種と識別される (Smith-Vaniz, 2023)。なお、Su and Ho (2024) が台湾の澎湖諸島から得られた標本に基づき記載した *O. cryo* は、背鰭に8個の暗色斑をもつことで *O. erdmanni* とは明瞭に異なる。

Opistognathus erdmanni は、日本に分布する同属他種と比較して、背鰭に4–6個の暗色斑をもつことで、セトアマダイ *O. liturus* とヤイトアゴアマダイ *Opistognathus trimaculatus* Hiramatsu and Endo, 2013 に似る。Smith-Vaniz (2023) によれば、*O. erdmanni* は *O. liturus* と比較して、頭部背面の感覚孔が多い (*O. liturus* では比較的少ない)、最前方の暗色斑が

Table 1. Counts and measurements of *Opistognathus erdmanni*

	This study URIL 2730 Miyako Island	Smith-Vaniz (2023) 5 type specimens Andaman Sea
SL (mm)	36.0	25.9–38.8
Dorsal-fin rays	XI, 11	XI, 11
Anal-fin rays	II, 10	II, 10–11
Pectoral-fin rays	20	19
Pelvic-fin rays	I, 5	I, 5
Branched caudal-fin rays	12	12
Gill rakers	9 + 22 = 31	9–10 + 19 or 21 = 29–31
Pre-dorsal fin length (% SL)	36.6	35.3–39.0
Pre-anal fin length	60.3	59.8–65.5
Dorsal-fin base length	55.2	62.4–65.3
Anal-fin base length	26.5	24.5–30.3
Pelvic fin length	34.4	25.0–33.8
Caudal fin length	31.0	27.1–32.1
Body depth	22.0	22.8–26.0
Caudal peduncle depth	13.5	13.1–15.7
5th dorsal-fin spine length	12.4	—
7th dorsal-fin soft ray length	22.3	—
Head length (HL)	38.0	36.0–38.9
Postorbital head length	21.1	—
Upper jaw length	24.2	24.0–27.3
Postorbital jaw length	7.0	8.5–13.0
Orbit diameter	12.4	11.8–12.9
Postorbital head length (% HL)	55.6	55.2–60.2
Upper jaw length	63.7	63.7–71.5
Postorbital jaw length	18.5	21.9–34.0
Orbit diameter	32.6	30.7–33.7

背鰭第 1–4 棘条の間にある（第 2–5 棘条の間にある）、背鰭に淡褐色の縦帯（背鰭の下半分は体の地色と同じ淡褐色）がある（ない）、上神経骨がない（ある）点で識別できる。さらに、*O. trimaculatus* と比較して、*O. erdmanni* は背鰭の暗色斑が 5 個であること（*O. trimaculatus* では 4 個）、鰓蓋や頬、主上顎骨に黒色素胞が密に分布する箇所がある（＝暗色斑を形成する）（ない）、尾柄に黒色縦帯が無い（ある）、鰓耙数が 29–31 と少ない（34 と多い）点で異なる（Smith-Vaniz, 2023）。

前述の通り、これまで *O. erdmanni* はタイプ産地であるアンダマン海のみ知られていた。よって、宮古島沖産の標本は、太平洋からの本種の初めての記録であるとともに、日本からの初記録となる。本種にはこれまで標準和名が提唱されていないため、記載標本（URIL 2730）に基づき、新標準和名コモレビアゴアマダイを提唱する。この和名は

本種にみられる背鰭の暗色斑紋から下方に延長する、やや緑色がかった横帯と、背鰭縁辺部の黄色域がそれぞれ樹木と森林の木漏れ日を連想させることに因む。

謝 辞

本研究で使用した標本は琉球大学理学部と長崎大学水産学部との単位互換制度に基づき実施された乗船実習の航海中に得られたものである。本実習ならびに航海を行うにあたり、長崎大学実習船長崎丸の乗組員の皆さま、長崎大学水産学部の筒井英人氏、琉球大学理学部乗船実習専門部会ならびに学務系の皆さまには多大なるご助力をいただいた。また、琉球大学魚類学研究室の皆さまには標本の作成・登録・管理にご協力いただいた。これらの方々に謹んで感謝の意を表する。本研究の

一部は、笹川平和財団オーシャンショット、および JST, CREST (E0204R01) の援助を受けた。

引用文献

- Fujiwara, K. and Y. Ikeda. 2024. Description of a new species of *Opistognathus* (Perciformes: Opistognathidae) from the southern Japan Sea. Ichthyol. Res., DOI 10.1007/s10228-024-00951-7. (also appeared in Ichthyol. Res., 72: 1–8)
- Fujiwara, K., H. Motomura and G. Shinohara. 2023. *Opistognathus ctenion* (Perciformes, Opistognathidae): a new jawfish from southern Japan. ZooKeys, 1179: 353–364.
- 古橋龍星・藤原恭司・本村浩之. 2023. 鹿児島湾から得られた九州沿岸初記録のアゴアマダイ科魚類 *Opistognathus flavidus* バナナアゴアマダイ (新称). Ichthy. Nat. Hist. Fishes Jpn., 31: 19–23.
- 林 公義・大栗智史. 2007. 日本産アゴアマダイ属 (アゴアマダイ科) 魚類の分類学的研究. 横須賀市博物館研究報告 (自然科学), 54: 27–57.
- Koreeda, R. and H. Motomura. 2025. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of the Koshiki Islands and adjacent waters, Kagoshima, southern Japan, with 353 new records. Bull. Kagoshima Univ. Mus., 21: 1–119.
- Smith-Vaniz, W. F. 1999. Family Opistognathidae. Pages 2588–2589 in K. E. Carpenter and V. H. Niem, eds. Species identification guide for fisheries purposes. The living marine resources of the western central Pacific. Volume 4. Bony fishes part 2 (Mugilidae to Carangidae). FAO, Rome.
- Smith-Vaniz, W. F. 2011. *Opistognathus albicaudatus*, a new species of jaw-fish (Teleostei: Opistognathidae) from the Andaman Islands. Zootaxa, 3085: 34–40.
- Smith-Vaniz, W. F. 2016. *Opistognathus ensiferus*, a new species of jawfish (Opistognathidae) from the Gulf of Mannar, India, with redescription of *O. solorensis* Bleeker. Zootaxa, 4196: 278–288.
- Smith-Vaniz, W. F. 2023. Review of Indo-West Pacific jawfishes (*Opistognathus*: Opistognathidae), with descriptions of 18 new species. Zootaxa, 5252: 1–180.
- Su, Y. and H.-C. Ho. 2024. A new species of the jawfish genus *Opistognathus* from Taiwan, northwestern Pacific Ocean (Perciformes, Opistognathidae). ZooKeys, 1220: 165–174.